

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『イジチュール』 : その孤立せる宇宙の無限について
Author(s)	重光, マリ子
Citation	フランス文学 , 14 : 17 - 27
Issue Date	1982-05-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040932
Right	
Relation	



『イジチュール』 その孤立せる宇宙の無限について

重 光 マ リ 子

本稿は前半において、『イジチュール』の宇宙の実態についての筆者の解釈を明らかにし、続いて後半で、それに基づいて、その宇宙の無限についての問題を論じる。

主人公イジチュールは、これまで彼の民族を虚無の海に沈めてきた偶然を排除せんがために、彼の民族によって絶対者として措定された人物である。

「あなたたち、数学者たちは息絶えた—私を絶対者として措定して。」¹

「私は虚無を知る事を欲しない、私の先祖たちに何故彼らが私をはぐくんだのかその理由を明らかにしおえるまでは—」²

そして彼の民族とは、先祖たちとは、半獣神、それに続いてはエロディアードを典型とする一族である。³ すなわち、美しい多様なイメージに満ちた夢想美の世界を唯一美なる世界とみなし、そのできうる限りの完全な作品化を彼らの使命として生きてきた民族である。このような夢想美の世界のあり様の一端は、『イジチュール』の中の「真夜中」と題された断片の中に窺いみる事ができる。⁴

「そこでは神秘なる家具は思考の曖昧な慄きを、その波の寄せ返しと最初の広がりとの光り輝く炸裂として停止させ、しかしながらその間、時間の落下のかつての場は久しく夢みられた純粹自我の麻醉的な穏かさの中に動かなくなる。(ある動いている限界の中で) ...」⁵

このような民族にとって、作品の不完全性の原因をなすと思われる夢想美の世界のとらえがたさとその意に背く消滅は、彼らを無能感に陥れ、彼らの存在の意義を疑わしめずにはおかぬはずである。そしてその消滅は、他ならぬ偶然によってもたらされるように思われるのである。

「闇と創造された時間とに私を分けたあの古くからの敵、偶然」⁶

故にこの民族の命運は、偶然を排除しうるか否か、排除して偶然による夢想美の消滅を無くし、その完璧な作品化を果たし得るか否かに一重にかかっていると思われるようになる。かくして、偶然を排除する力をもった絶対者として、イジチュールが措定されるに至るのである。

「これらすべての事は、彼の民族が純粹だったという事であり、その純粹を絶対者にまで高めたという事である。」⁷

逆にいえば、事物の絶対的なあらわれとしての完璧な夢想美の時を創出する事ができ、さらにそれによって、その完璧な作品化を果たし得たならば、偶然は排除されたという事になる。この完璧かつ絶対的な夢想美の時として定められた時が、真夜中である。そして賽の目、すなわち言葉によって示し出されるものは、この真夜中の十二時の十二と符合する十二でなければならない。

「もし私が喜劇役者として勝負に出ようとすれば、— 十二 —、いかなる意味においても偶然はない。」⁸⁾

しかし真夜中はいかに絶対的な時として定められた時とはいえ、それはやはり時である限り、時の中に留まらざるを得ないものである。⁹⁾ いいかえるならば、真夜中はいかに真夜中とはいえ夜そのものなのでは決してなくて、夜に分節である真夜中というひとつの夜にすぎないのである。

「賽壺は一角獣の角である — ユニコルヌの。」¹⁰⁾

イジチュールはこれを知っている。これを知っているから、彼の民族が彼に託す望みのおよそ気違いじみている事を感じないではいられない。

「彼らの狂気のうつろなる事を確かめるばかげた行為。」¹¹⁾

真夜中の本来的な虚しさを知るイジチュールは、あえて賽を投げる事をせず、手を閉じたまま、真夜中を後にして、夜そのものへと降りてゆく。人間精神の階段をためらいつつもつたい降りながら。すなわち、書きあらわすという行為をやめて、人間精神の本質を把握せんがための思惟に身を委ねるのである。

思惟は次のように展開される。

まず、夢想美の世界の消滅は、単に一現象としての夢想美の世界の消滅にすぎず、何らそれによって主体の、あるいは本質の消滅が意味されるのではないという事。

「まるで、墓の扉の一回かぎりの衝撃であった全体的な落下が、その主を永遠に窒息させるというのではないかのように。」¹²⁾

次にその消滅も、嘆かれるべきものではなくて、精神の営みが停滞しないためには必要なものであるという事。

「それ(幻)は際限なく逃走的であったに違いない、結局は明らかにされたのだが、理解される事のなかったところのものの段階的な重み、漸進的な圧迫が、もし一间隙の中への確かな脱出を、停止を含んでいなかったならば。」¹³⁾

これまでの営みは、本質をあからさまにせんがために、非本質的なものはすべて捨象しようとする精神の働きに負うものであったという事。

「その多くの多くの天才達は、自己それ自体のうちに自らを映し出さんがために、その墓の中へ、おのれのあらゆる塵を集め入れる事に腐心したのだ。」¹⁴⁾

要するに、夢想美の世界に完璧を求めたのは錯誤であったという事。

「予見された演繹による結果の完全なシンメトリーはその実際と矛盾していた。」¹¹⁵

こうして夢想美の世界のイメージという影は斥けられて、今やその代わりに、本質それ自体を体現するイメージである純粹なる影の完璧な現出が求められる。それは、イメージによって、イメージを介して、自己の本質についての確信をゆるぎないものにしたという欲望によるものである。それ故主人公イジチュールは、自己の本質それ自体のあらわれとしての純粹なる影に自ら変装する。本質についての信仰に生きんとするものがその信仰の確立のためにとりおこなう祭儀といえる。¹¹⁶

ところでこの影は本質それ自体のあらわれなのであるから、本質の名において時を超越して、未来と過去とを完全に掌握し、すべてを一として自身のうちに内包すると考えられるのである。

「自己の高みに至った純粹なる影は、過去と未来とを、それらの外にあって、完全に十全に支配する。」¹¹⁷

しかしながら純粹なる影の明らかなさはイジチュールを息苦しくする。イジチュールはこの変装から解放されて、もとの姿の自分に帰る事を欲する。だが、純粹なる影の消滅は、夢想美の世界の消滅の場合と同じく、イジチュールを再び疑いにひき戻してしまうのではないか。

「要するに、それは自己の劣れる主の剛毛の生えた腹ではなくて、...、勝れた一民族のヴィロードの胸像である。」¹¹⁸

いうならば、純粹なる影は、いかなる非本質的なものをも含まぬ本質それ自体の純粹なるあらわれであり、そのあらわれを介して、本質についての信仰が確立されたと考えられる今や、あらわれの消滅を怖れる理由は何らないと考えられるのである。不安なく、再びイジチュールはもとの自分の姿に帰り得るといえるのである。

ところで純粹なる影が体現する本質とは何であるのか。

「このガラス壘、純粹、虚無という実体を含むところの。」¹¹⁹

「海には欠如せる虚無の滴。」¹²⁰

「それは純粹なる夜だった。」¹²¹

夜、虚無である夜、だがしかしその虚無は海には欠如せる虚無、すなわち人間精神においてのみ考えられる意味ある虚無。であるから、イジチュールがその祭儀を通してした事は、この虚無をこそその意味性において唯一存在の名に価するものとして祭りあげ、虚無=存在としたという事だともいえるであろう。そしてこの後は、夢想美の世界の様相を映し出す事ではなくて、本質的に虚無である精神という宇宙のその進展の様相を映し出す事が、詩人の義務であると考えられるようになるのである。¹²²

さて、これより無限についての問題に移る。

以上の『イジチュール』の宇宙についての概観からも、すでにいくらか察せられると思われるが、イジチュールにあっては、その最初においては、無限は、事物の絶対的なあらわれとしての完璧な夢想美の世界が、偶然によって消滅する事なく無限に現存するという意味において求められていたのではなかったかという事である。

「私は私の魂を常に時計の上に釘づけにして生きてきた。確かに、私はそれが打ち鳴らす時が、部屋の中に現存して留まらんがために、そして、それが私のため、糧とも命ともならんがために、すべてを尽くした—」²³⁾

すなわち、無限は、永遠の一現在²⁴⁾という意味において求められていたのではないか、という事である。しかしながら、

「現在はない、否 — 一現在は存在しない...」²⁵⁾

永遠なる一現在という意味において無限を求める事は、単位的に、分割的にしか、従って非本質的にしかものごとを考えない数学者達の誤りであったと考えられる。

「《あなた方は間違っている》無動。無限は、あなた方が否定した偶然より発する。あなた方、数学者達は...」²⁶⁾

「何故なら偶然はありかつないから — 彼は偶然を無限に帰す — 彼が言うには、どこかにあらねばならない無限に。」²⁷⁾

無限は、完璧な夢想美の世界の永遠の現在という意味においてではもはやなく、虚無を本質とする精神の営みの中に感じられるようになる。偶然はこの営みをその停滞から救い無限にあらしめるために、むしろ必要不可欠な発条のようなものとさえ考えられる。こうして偶然が、防ぎえない外的破壊者としてではもはやなく、精神の営みに必要な一要素として無限のうちにとりこまれる時、偶然は怖るべき敵ではもはやなくなり、それどころか無限の栄光に寄与するものとみなされるのである。であるから、筆者には、『イジチュール』の審美的、形態的に考え抜かれた書きかえであると思われる詩、『賽一擲』のあの言葉、「賽一擲は決して偶然を排除しないだろう」という言葉は、これまで一般に理解されてきたとは反対に、誇りやかな勝利の言葉のように思われる。²⁸⁾ 何故なら偶然は無限に帰されるのであるから。そして無限は精神という存在の営みの中に感じられるのであるから。

けれども、ここであらためてこの精神という存在について考えなおしてみると、マラルメの精神が、彼いうところの祭儀の過程をとおしてなした事というのは、要するに、思惟によって自己から、非本質的、従って有限的、個的なものすべてを捨象していったという事であったかと思われる。であるが、確かにそれによって精神は自己を本質的なもの、無限的なものにまで高める事ができるかもしれないが、思うに、だからといって、それによって、現実には、人間精神の有限性が消えてなくなったという事には、決してならないであ

ろうという事である。何故なら、有限性を捨象するという操作は、単に思惟によってなされるのであって、現実になされるわけではないからである。²⁹ もしも、それをあえて精神の無限性を信じようとするれば、精神は、人間という個的、有限的存在者から遊離されて、それ自体として絶対的に存在するものと想像されなければならないであろう。すなわち、精神を神格化して、現実の人間はいわばその働き手のようなものとみなされねばならないであろう。

「僕は今や非個人的であり、君が知っているステファヌではもはやなくて — 靈的宇宙が僕があったところのものを通して、自らを映し、自らを發展させるためにもつ—能力だ……」³⁰

だが、そうした精神は、はたしてどこに位置づけられるものであろうか。

「そうだ、私は知っている。この夜のかなたに

それをより暗くする事はなかった醜悪な諸世紀の下、
地球は大いなる輝きの異常な神秘を投げかけている事を。

空間は増大しようとして縮小しようとしてそれ自体に変わりはなく、
その倦怠の中に卑しい火を転ばす。

一天体の精神が祝祭において点火された事の証人として。」³¹

マラルメにおいてはおそらくヘーゲルにおいてと同じく、生成発展する主体としての精神のみが、意味あるものとして存在するといえるのである。そのような精神をもたぬと考えられる空間は、自然は、その存在に何らの意味をもたぬ全くの虚無、倦怠そのものと考えられる。「そうだ、文学は存在する、そして言ってよければ、文学のみ、すべてを除いて。」³² というあの誇りやかな断言は、こうした思想に依るといえるであろう。マラルメは文学という言葉によって、単に作品ではなく、作品を含む文学空間を、従って精神という宇宙を常に暗示していると思われるから。

ところで、先のソネットから解されるには、精神が位置づけられるのは地球にである。そして祝祭においてなされる事は、すでに言ったように、精神からあらゆる有限性を捨象する事であり、そのような事をなしうる精神とは人間精神、それも勝れて精神的な人間精神であるとしか言いえないであろう。つまり、唯一意味ある存在とされる精神は、現実には、ごく限られごく選ばれた人間の中にしか位置づけられないと考えられる。それはきわめて限られ、きわめて孤立した、さらにいうならば、きわめて排他的な宇宙だと言えよう。

にもかかわらずその無限性を信じようとするれば、再びもとに戻ってくりかえすようだがやはり、それを人間存在からひき離して、それ自体として絶対的に存在するものとするより仕方ないと思われる。という事はすなわち、「それは...(で)ある」³³ と断言してからは、

どこにあるのかは決して明確には問題としないという事が肝要なのである。あるいは、神秘化された曖昧さの中に逃げる事である。

「無限，…… どこかにあらねばならない。」³⁴⁾

「あの高みを 除いては、おそらく、」³⁵⁾

そしてその後はただ夢みる事、孤立してはいるが、それ自体として絶対的に存在する無限なる精神という宇宙を夢みる人となる事であろうか。

確かに、その者が夢みる宇宙こそが、その者にとっては真に存在するといいうる宇宙なのだと思えるべきなのかもしれない。けれども夢からさめて、夢の外に転がり出てしまった者にとっては、それまで夢みられていた宇宙の嘘を信じ続ける事は、もはやできない事であり、その者は、再びより深刻なニヒリズムへと転落せざるを得ないのではないだろうか。そして、そのニヒリズムの底から、さらに再び、そのようなニヒリズムさえも超克するより大いなる夢へと、³⁶⁾ 全的な肯定へと、まさに虚無であるところの大いなる存在そのものへと飛躍、轉身してゆくべきなのではないだろうか。それはおそらく結果として、『イジチュール』の孤立せる宇宙の扉を外へと向けて開く事、否、というよりむしろ、孤立せる宇宙を真に大いなる宇宙に包摂せしめる事になるに他ならないだろうと思われる。すなわち、「それは...(で)在る」から『在る』へと夢を開く事。しかしながら、それにはおそらく、何よりも、『イジチュール』の宇宙の嘘を支えていたと思われる人間精神の傲慢が、その自らへの執着が捨てられなければならないのではないかと、そう今の私には思われるのである。

〔註〕

* OC.はMallarmé OEuvres complètes; Bibliothèque de la Pléiade の略とする。

(1) Vous, mathématiciens expirâtes – moi projeté absolu.

OC.p.434 *Igitur*

(2) je ne veux pas connaître le Néant, avant d'avoir rendu aux miens ce pourquoi ils m'ont engendré –

OC.p.451 *Igitur*

(3) この一族の血は、マラルメの詩の世界のみに限らず、広くまた遠く、他の詩人たちの詩の世界にも流れているものとして受けとめるべきではなからうか。

cf. Baudelaire: *Le spleen de Paris*; (La chambre double)

Rimbaud: *Illuminations*; (Veillées), (Being Beauteous)

(4) *Hérodiade* の Ouverture, およびソネット *Ses purs ongles très haut*

dédiant leur onyx には、特にマラルメの夢想美の世界のあり様があきらかである。

- (5) où le mystérieux ameublement arrête un vague frémissement de pensée, lumineuse brisure du retour de ses ondes et de leur élargissement premier, cependant que s'immobilise (dans une mouvante limite), la place antérieure de la chute de l'heure en un calme narcotique de *moi* pur longtemps rêvé;

OC.p.435 *Igitur*

- (6) le hasard, cet antique ennemi qui me divisa en tenebres et en temps créés,

OC.p.438 *Igitur*

- (7) Tout ce qu'il en est, c'est que sa race a été pure: qu'elle a enlevé à l'Absolu sa pureté,

OC.p.442 *Igitur*

- (8) *-si ja compte, comédien, jouer le tour - les 12 - pas de hasard dans aucun sens.* 傍註として

OC.p.442 *Igitur*

- (9) 少くとも『文学空間』においては、筆者の解する限りでは、ブランショは、『イジチュール』の「真夜中」の意味するところを、マラルメの精神の進展の中で把握するのではなく、ブランショ自らの思想で色づけてしまっているように思われる。すなわち、「真夜中」に絶対的な死の瞬間をみているようである。それは確かに魅力的な見方ではあるが、筆者にはやはりマラルメの意思から外れた見方のように思えてならない。

cf. Et si vraiment, pour parvenir souverainement à la mort, il est nécessaire qu'il s'expose à la présence de la mort souveraine, ce milieu pur d'un Minuit qui le « rature » et l'efface, une telle confrontation, une telle épreuve décisive est manquée, car elle s'accomplit à l'abri de la conscience, sous sa garantie et sans risque pour elle.

Maurice Blanchot : *L'espace littéraire* Gallimard p.145

- (10) *La Cornet est la Corne de licrne - d'unicorne.*

OC.p.441 *Igitur*

- (11) - l'acte absurde pui atteste l'inanité de leur folie.

OC.p.451 *Igitur*

- (12) comme si la chute totale qui avait été le choc unique des portes du tombeau, n'en étouffait pas l'hôte sans retour;

OC.p.436 *Igitur*

- (13) elle devait être indéfiniment fuyante, si une oppression progressive, poids graduel de ce dont on ne se rendait pas compte, malgré que ce fût expliqué en somme, n'en eût impliqué l'évasion certaine en un intervalle, la cessation :

OC.p.437 *Igitur*

- (14) dont maint et maint génie fut soigneux de recueillir toute sa poussière séculaire en son sépulcre pour se mirer en un soi propre.

OC.p.437 *Igitur*

- (15) la symétrie parfaite des déductions prévues démentait sa réalité ;

OC.p.437-p.438 *Igitur*

- (16) cf. Tout, comme fonctionnement de fêtes : un peuple témoigne de sa transfiguration en vérité.

OC.p.371 *Quant au livre*

- (17) du passé et de l'avenir que parvenue au pinacle de moi, l'ombre pure domine parfaitement et finis, hors d'eux.

OC.p.438 *Igitur*

- (18) Enfin ce n'est pas le ventre velu d'un hôte inférieure de moi,, mais le buste de velours d'une race supérieure...

OC.p.439 *Igitur*

- (19) cette fiole de verre, pureté, qui renferme la substance du Néant.

OC.p.439 *Igitur*

- (20) la goutte de néant qui manque à la mer.

OC.p.443 *Igitur*

- (21) elle était la Nuit pure,

OC.p. *Igitur*.

- (22) cf. je ne puis subir que les développements absolument nécessaires pour que l'univers retrouve, en ce moi, son identité. Ainsi, je viens, à l'heure de la Synthèse, de délimiter l'OEuvre qui sera l'image de ce développement.

Lettre de Mallarmé à Cazalis ; 14 mai 1867

Henri Mondor; *Vie de Mallarmé* ; Gallimard p.237

- (23) j'ai toujours vécu mon âme fixé sur l'horloge. Certes, j'ai tout fait pour que le temps qu'elle sonna *restât* présent dans la chambre, et devînt pour moi la pâture et la vie -

OC.n.439 *Igitur*

(24) 永遠なる「一現在」は、しばしば「月」によって象徴されている。

cf. Puis - comme il aura parlé selon l'absolu - qui nie l'immortalité, l'absolu existra en dehors - lune, au dessus du temps;

OC.p.433 *Igitur*

cf. Mais la lune, qu'il appelle avec mépris « ce fromage » lui semble inutile. Il rêve sérieusement un âge plus savant de l'humanité où on la dissoudra très facilement par des moyens chimiques. (IlはMallarméを指す.)

Journal manuscrit, par Francois Coppée

Henri Mondor; *Vie de Mallarmé* ;p.328-d.329

(25) il n'est pas de Présent, non - un présent n'existe pas...

OC.p.372 *Quant au livre*

(26) « Vous avez tort » nulle emotion. L'infini sort du hasard, que vous avez nié. Vous, mathématiciens... OC.p.434 *Igitur*

(27) car il y a et il n'y a pas de hasard - il réduit le hasard à

l'Infini - qui, dit-il, doit exister quelque part. OC.p.442 *Igitur*

(28) この言葉の背後に絶望や皮肉あるいは自嘲をみるのではなく、まさしくひとつの霊的宇宙をこそみるべきではなからうか。だがまた同時に、ひとつの霊的宇宙をであって、すべてを内包する宇宙をではない事にも注意されなければならないのではないかと思われる。

(29) キルケゴールの言葉を想起してほしい。

「自己を無限化する事によって自己を無限に自己自身から解放すると同時に、自己を有限化する事によって自己を無限に自己自身へと還帰せしめる事。」

キルケゴール『死にいたる病』

岩波文庫版 45ページ

「このように感情ないし認識ないし意志が空想的になることによって、最後に自己の全存在が空想的になるようになる、... その場合自己は抽象的な無限性ないしは抽象的な孤立性の中で空想的な生存を営む。」

同上48ページ~49ページ

(30) je suis maintenant impersonnel, et non plus Stéphane que tu as connu, - mais une aptitude qu'a l'univers spirituel à se voir et à se développer, à travers ce qui fut moi...

Lettre de Mallarmé à Cazalis, 14 mai 1867

Henri Mondor; *Vie de Mallarmé*, p.237

- (31) Oui, je sais qu'au lointain de cette nuit, la Terre
 Jette d'un grand éclat l'insolite mystère,
 Sous les siècles hideux qui l'obscurcissent moins.

L'espace à soi pareil qu'il s'accroisse ou se nie
 Roule dans cet ennui des feux vils pour témoins
 Que s'est d'un astre en fête allumé le génie.

OC.p.67 *Quand l'ombre menaçait de la fatale loi* ...

この詩の創作時期に関しては、「即ち『イジチュール』が1867年から69年頃の創作である事が明瞭である以上、《Quand l'ombre menaçait de la fatale loi》もその頃の創作と断定して誤りはないように思われる。」(『鈴木信太郎全集第4巻』408ページ、大修館書店)という見解に同感する。

- (32) Oui, que la Littérature existe et, si l'on veut, seule, à
 l'exception de tout.

OC.p.646 *La Musique et les Lettres*

- (33) cf. Rien là que je ne dise moi-même, moins bien, en
 l'éparse chouchoterie de ma solitude; mais où vous êtes le
 divinateur, c'est, oui, relativement à ce mot même: C'est,
 titre d'une interminable étude et série de notes que j'ai là
 sous la main, et qui règne au dernier lieu de mon moi.
 Tout le mystère est là;

Lettre de S.Mallarme à F.Vielé-Griffin, 8 août 1891

Henri Mondor; *Vie de Mallarmé*, p.617

- (34) l'Infini - qui,..., doit exister quelque part.

OC.p.442 *Igitur*

(35) EXCEPTÉ

à l'altitude

PEUT-ÊTRE

OC.p.476 *Un coup de dés*

(36) ハイデッカーの次のことばを想起してほしい。

「詩は我々の親しんでいる手づかみのできる日常的な現実には比して非現実的であり夢であるというような観をよびおこす。けれども逆に詩人が語るところのもの、詩人が、かくあらんと目指すところのもの、これこそが現実的なるものである。」

ハイデッカー『ヘルダーリンの詩の解明』(理想社)65ページ

(広島大学大学院博士課程)